

新たな愛のあり方を求めて

—チャョーサーの *The Complaint of Mars*—

西 田 栄 毅

I

この詩は、チャョーサーの他の初期の作品と同じく、長い間寓意的な作品——F. N. Robinsonの言葉を借りれば、“an allegory of an intrigue at court”¹⁾——として読まれてきた。更に、その特殊な物語構造のために、占星術的あるいは天文学的な面からの研究・解釈も盛んに行なわれてきた。しかし、ここでは、そうした研究を参考とはしつつも、別の観点からの分析と解釈を試みたい。

*The Parliament of Fowls*と同じく、この詩は聖ヴァレンティンの祝日に、鳥たちが伴侶選びをする際に、一羽の鳥が日の出前にマルスとヴィーナスの物語を語るのを、詩人が洩れ聞いたという設定になっている。ただし、これは *The Parliament of Fowls* とは違い、“dream vision”ではない。しかし、作者チャョーサーはこの設定によって、夢物語の場合と同様に、現実の自己と語り手の詩人との間に虚構空間を置いていると言える。あるいは、この設定は、現実の世界から聴衆ないし読者の意識を物語の世界へ転換させる契機としての機能を果たしている。

“Proem”において伴侶選びを奨めて、鳥は歌う。

... I rede yow al awake,
And ye that han not chosen in humble wyse,
Without repentyng cheseth yow your make;

And ye^o that han ful chosen as I devise,
 Yet at the leste renoveleth your servyse;
 Confermeth hyt perpetuely to dure,
 And patiently taketh your aventure.

(15-21)²⁾

いかなる助言なのか具体的にはわからないが、恐らくコンヴェンショナルな宮廷愛の教え³⁾を当時の聴衆は想起したと考えるのが妥当だろう。ここには更にチョーサーの複雑な想いが反響しているように思われる。例えば、最後の二行に見られるような忠告を守る者が、宮廷の中に幾人いたかと考えると、この詩行は空疎にあるいは皮肉に響く。⁴⁾しかし同時に、その皮肉な調子の中に彼の真摯な態度が感得せられる。これは、彼の目的が宮廷人たちを単に揶揄することにあつたのではないことを示している。換言すれば、彼の創造意欲を駆り立てたモチーフが文学的次元にあつたということである。

Gardiner Stillwellによれば、中世の“Valentine-poems”で最も一般的な主題は、

- (1) the lover's sharing the joy of the birds or of happy lovers, and (2) his contrasting his sadness with the joy of the birds or of men more fortunate than he.⁵⁾

の二つであるという。この詩も *The Parliament of Fowls* も少なくとも通常の“Valentine-poems”とは言い難いようだ。⁶⁾ こうした特徴の中にチョーサーの創造意欲の表れを見たとしても、強ち見当違いではあるまい。その創造意欲とは一体どういうものか。それは人間の新たな愛のあり方の追求だと思われる。⁷⁾ そして、それは宮廷愛の概念の否定、あるいはそれから一步踏み出すことを意味する。ただ、チョーサーのその問題追求の態度は極端な形をとらず、真向うから他の伝統的な詩人たちを揶揄したり、否定したりしない。伝統の重要性はそれなりに認めかつ利用するといった穏当なものである。ここに彼の作品の各表

現が真剣とも皮肉とも識別し難い印象を与える原因の一端がある。上に指摘したチョーサーの関心の在所を示す作品として、この他にも *The Parliament of Fowls* はもとより、*The Book of the Duchess* や *The House of Fame* などの初期作品群が挙げられる。特に、最後の作品中で“dreamer”が“newe tydynges of love”を求めて名声の館へ飛翔するという設定には、それが如実に表現されていると言える。チョーサーの追求した愛の終極的なあり方がいかなるものであったか、彼の全作品を通して推察するほかないけれども、彼の志向したものの手懸りはこの詩の中にもある。

II

“Proem”に続く“Story”は、火星（マルス）と金星（ヴィーナス）の天体における惑星としての説明で始まる。ところが、途中より神話のマルスとヴィーナスの逸話が挿入され、両者が絡み合って物語は進展してゆく。この興味深い物語設定は、詮索好きな研究者の好餌となった嫌いがある。Chauncy Woodは、ホーマーやオウィディウスから“Vatican mythographers”に至るまでのマルスとヴィーナスの物語の諸版を綿密に調べて、

The story of Venus and Mars as we have it in the *Complaint of Mars* ... is modelled after a humorous Ovidian story, and the sub-theme of Mars' change from warrior to lover, effected by Venus, is put to comic, not philosophical, use.⁸⁾

という見解を呈示した後、更に、Albohazen HalyやAlubaturやGuido Bonattiなどの著作を論拠として以下のように述べている。

We may say with some assurance ... that in the Middle Ages the conjoining of Mars and Venus in classical legend was echoed in the accounts of the astrologers, who associated various kinds of lecherous

behavior with various relationships of the two planets. Thus, Chaucer would know that in writing a poem about Venus and Mars and executing part of it in astrological terms he would be doubly concerned with adultery and fornication. From its classical background his audience would expect the story to be funny; from its astrological nature, to be unfortunate.⁹⁾

確かに、浩瀚な資料に裏付けされた見解には説得力があるが、今日のチャースーの読者ばかりではなく、その当時の聴衆に、恐らくはラテン語の文献からの知的素養を多く期待するのは、無理だと思われる。また、聴衆の知的レベルを総体的に等質と想定することは、厳に慎まねばならない。彼らは“Proem”の最後のスタンザで、

... for the worship of this highe feste,
 Yet wol I, in my briddes wise, synge
 The sentence of the compleynt, at the leste,
 That woful Mars made atte departyng
 Fro fresshe Venus in a morwenynge,
 Whan Phebus, with his firy torches rede,
 Ransaked every lover in hys drede.

(22-28)

と示された時、物語の枠組みを各自の知識に応じて把握し、予想したはずである。そして、物語の進展に従い、それぞれの予想に照らして頷き、賛嘆の声を発する者もあれば、首を傾けて顔を顰める者もいたろうし、予備知識のない者は夢中になって聞き入っただろうと想像できる。そういう人々がチャースーの詩に期待したのは、有益な知識であり、娯楽であり、精神のカタルシスではなかったか。¹⁰⁾

当時は今日ほど独創性ということが問題にされなかったとしても、陳腐な語

り方をすればやはり詩才を疑われ、詩法の未熟や浅学の謗りを受けただろうし、かといって余りに突飛な方法も失笑を買う破目になるだけだったろう。占星術と神話の併用という着想は、聴衆を満足させるに足るだけの趣向の必要を感じたチョーサーが、案出したか、いずれからか借用したものと思われる。¹¹⁾これは今日のわれわれの眼から見ても秀抜な着想であり、かつ“Story”の構造も巧緻である。¹²⁾そのことは、一つひとつの表現が単なる機械的な使用・借用に終わらず、人間の内実に基づいた声を発すべく、チョーサーの精神の洗礼を受けたことを示している。現代のわれわれがチョーサーを読んでいつも感心させられるのは、人間の内面の機微に対する洞察の深さと均衡のとれたその描出感覚である。彼は描く人物、対象に対して常に一定の距離を置いている。しかも、詩が単調に流れることがない。これは他の者の追隨を許さないチョーサーの一つの特質と言える。この特質がなかったら、占星術と神話の併用という試みも有機的な連繋を欠き、銜学的な奇想の類に堕していたものと思われる。

しかし、その着想の原因として、もう一つ愛の概念の存在を認めることができる。周知のように、日本語の“愛”という語も英語の“love”もその意味するところは多様で、複雑で曖昧であり、各人各様に理解し、使用されているようにさえ見える。男女、兄弟姉妹、親子、神と人間、その他の二者間を結ぶ絆としての愛は、古来広く知られている。更に、森羅万象の調和を保つものとしても愛という概念は使用された。例えば、ボエティウスによる次のような記述の中にそれが見られる。

That the world with stable feyth varieth accordable chaungynges; that the contrarious qualites of elementz holden among hemself allyaunce perdurable; that Phebus, the sonne, with his goldene chariet bryngeth forth the rosene day; that the moone hath comaundement over the nyghtes, whiche nyghtes Esperus, the eve-sterre, hath brought; that the see, gredy to flowen, constreyneth with a certein eende his floodes, so that it is nat leveful to strecche his brode termes or bowndes uppon the erthes

(*that is to seyn, to coveren al the erthe*) — al this accordaunce of thynges is bounde with love, that governeth erthe and see, and hath also comendement to the hevene. And yif this love slakede the bridelis, alle thynges that now loven hem togidres wolden make batayle contynuely, and stryven to fordo the fassoun of this world, the which they now leden in accordable feith by fayre moevynges.¹³⁾

こういう考え方の伝統を考慮に入れると、この詩で扱われている愛の主題が、単に男女の関係ばかりではなく、もっと根源的な哲学的問題までその射程距離内に捉えているように思われる。¹⁴⁾したがって、占星術と神話の併用という着想は、チョーサーが愛の基本概念をこのような背景のもとに理解し、それをマルスとヴィーナスの悲劇的な物語の中に表現しようとした結果、生じたとも考えられる。その場合、詩人の創意が詩の構造の工夫を要求したのだと言えよう。

III

恋愛は強い者を弱くし、弱い者を強くする。いかに武勇の誉の高い武人でも、愛しい女性の前にはひれ伏すし、他方、武力とは無縁の媚やかなる女性がむくつけき野人を従順な下僕に変えることができる。このような恋愛は古今東西の文学作品に数えきれないくらい見出せる。この詩に扱われたマルスとヴィーナスの関係もその例の一つと言える。二人は出会い、恋に落ちた。ヴィーナスは“as a maistresse”マルスに恋人としての心構えを説く。そして、

For she forbad him jelosye at al,
And cruelte, and bost, and tyrannye;
She made him at her lust so humble and tal,
That when her deyned to cast on hym her ye,
He tok in pacience to lyve or dye.
And thus she brydeleth him in her manere,
With nothing but with scourging of her chere.

これは明らかに宮廷愛を意識した叙述である。C. S. Lewisの言葉を借りれば、11世紀における宮廷愛と呼ばれる“sentiment”の発見は、ルネッサンスさえも“a mere ripple on the surface of literature”にしてしまうほど革命的な事件であった。¹⁵⁾したがって、これがその後の文学作品の主題となり、席捲したのも無理からぬことであろう。だが、チョーサーはその影響を受けながらも、一抹の疑念を払拭できなかったのではなかろうか。その疑念のもと恐らく宮廷愛の反社会的性質に胚胎している。なぜなら、宮廷愛の説く恋愛は、Lewisも言う通り、基本的には姦通という性質を帯びているからである。¹⁶⁾

当時の人々の精神生活を支配していたのは、キリスト教教会であったことは周知の事実であるが、それとは根本的に背馳し、密通・姦通を懲罰して憚らぬような恋愛至上主義的な理論が堂々と存在していたというのは、驚嘆のほかはない。もちろん、宮廷愛は理論の上では肉体的な交わりは許していなかった。¹⁷⁾だが、現実には男女の関係が理論通りに運ぶはずがない。それにしても、一方では封建制度の中で女性の地位を極端に低く押さえながら、他方では貴婦人を至高の存在として崇めるというコンヴェンションを作り上げた中世という時代は、端倪すべからざる謎を秘めた時代のように思える。こういう時代状況の中にあって、詩人たちはその大いなる矛盾に気付かなかっただろうか。男女間の性愛を宗教的な愛にまで昇華させて、両者の対立を融合させるのに成功した、ダンテのような詩人もいるにはいたが、宮廷愛を描いたほとんどの詩人はその問題の宗教的な側面は暫時措いて筆を進めたようである。¹⁸⁾宮廷愛がいかなる洗練された意匠を究めようとも、姦通と見做されるほかはない要素を内包していたとすれば当然かもしれない。たとえ、それが精神性においていかに至純なものであったとしても、である。そこにいわば宮廷愛の限界が潜んでいる。このために、宮廷愛の存立条件として秘密が不可欠となるのである。

マルスとヴィーナスも密会を行ない、それが“jealous Phebus”の知るところとなり、二人は別離を余儀なくされる。チョーサーはオウィディウスのように二人の密会の現場にヴィーナスの夫のウルカヌスを踏み込ませず、マルスにはあくまで立派な騎士らしく振る舞わせ、ヴィーナスを逃がす役割を与えている。

だが、密会という形をとらざるをえない愛の不安定性は十分に暗示されている。姦通によってしか成立しえない愛というのは、反社会的であり、背理的、背徳的な存在であり、かつ、現実には決して結ばれぬ愛というのは不毛と言うべきである。したがって、それは虚構の論理によってのみ存在を許されるものであろう。チョーサーはそういう認識の上に、別の現実的な愛の形態の模索を試みたと推測できる。

そのような推測を可能にする理由は、この詩全体にそれとなく配された、宮廷愛の教えに反する表現の中に認められる。例えば、それは、先に引用したスタンザの中の“jelosye”(36)やフォイボスに冠せられた“jealous”という形容辞、更に以下に引用する冒頭のスタンザに見られる“the sunne, the candel of jelosye”という表現に顕著に示されている。なお、このスタンザには、密会に伴う不安にも同時に言及されている。

Gladeth, ye foules, of the morowe gray!
 Lo! Venus, rysen among yon rowes rede!
 And floures fressh, honoureth ye this day;
 For when the sunne uprist, then wol ye sprede.
 But ye lovers, that lye in any drede,
 Fleeth, lest wikked tonges yow espye!
 Lo! yond the sunne, the candel of jelosye!

(1-7)

Andreas Capellanusの*De Arte Honeste Amandi*の中に記された恋愛の神の規則に次のような条項がある。

‘He who is not jealous cannot love.’

‘Real jealousy always increases the feeling of love.’

‘Jealousy, and therefore love, are increased when one suspects his

beloved.¹⁹⁾

以上のことから、宮廷愛においては嫉妬は恋愛の成立要因としてかなり積極的な意味が与えられていることがわかる。ところが、チョーサーは嫉妬を恋愛瓦解の原因とする設定をとり、アイロニカルな宮廷愛批判を暗に示している。それと同時に、ここには彼独自の恋愛形態追求の姿勢が読みとれる。

しかし、恋人たちはどこへ逃げたらいいのだろうか。

IV

“jealous Phebus”に追いたてられて、ともかくもヴィーナスは逃げた。そして、マーキュリー (Cilenios) の館に匿われた。マーキュリーは彼女をやさしく迎えた——“... Venus he salueth and doth chere, / And her receyveth as his frendful dere.” (146-47)。ここでチョーサーは、ヴィーナスがマーキュリーと新たに結びついたことを暗示しているように思われる。²⁰⁾しかし、当時の彼の聴衆がこの叙述から、ヴィーナスが裏切ったと見做したかどうかはわからない。なぜなら、一人の女性が二人の男性に愛されることは、宮廷愛では禁じられてはいないからである。²¹⁾

ヴィーナスのマーキュリーとの関係は、聴衆にはわかっているが、マルスは最後まで知らないままヴィーナスの不幸を思っただけで、劇的アイロニーが生じる。²²⁾しかも、この状況は同時に宮廷愛に対するアイロニーとしての機能も果たしている。自己の愛する婦人をその美しさや徳を称えて、神秘化し、崇拜の対象とした騎士が、みごとに裏切られる構図がここにははっきりと看取できる。男女間の愛とは本来独立した個人の自由意志による対等な関係において成立すべきものである。ところが、宮廷愛は女性を官能的な愛の対象としてではなく、純粹な精神的な愛の対象として、領主あるいは神のごとき地位にまで高めることを要求する。²³⁾これは相手となる女性が多くの場合有夫であり、結婚及び肉体的な交わりは厳に禁じられねばならなかったからであろう。しかし、過度の禁欲主義は、逆説的に言えば、自虐的な快樂主義と同質であり、かつ、神

秘的な快樂主義に転化する可能性を常に秘めている。宮廷愛における女性の神秘化・理想化は、女性自身の真の美しさや徳の価値によるというよりも、むしろ男性自身の自己満足的な願望・快樂の裏返しとの表現と思われる。したがって、騎士の婦人への隷従は、一見すると婦人への敬意の表現のようだが、実際には騎士自身の快樂に深く根ざしたものである。チョーサーは宮廷愛の志向する純粹な精神的愛の内包している、このような欺瞞性を適確に見抜いていた。ヴィーナスとマーキュリーとの新たな関係を暗示する言及から生じる、マルスによって彼自身の空想の中で至高の存在へと高められ、崇められた虚構のヴィーナスと現実のヴィーナスとの落差が如実にそのことを物語っている。

また、C. S. Lewisの言ったように、宮廷愛は愛の宗教 (Religion of Love) という性格を帯びている。²⁴⁾愛の宗教はしばしば現実の宗教のパロディとして始まると述べた後、彼は次のような指摘を行なっている。

... it [that the love religion often begins as a parody of the real religion] does mean that we must be prepared for a certain ambiguity in all those poems where the attitude of the lover to his lady or to Love looks at first sight most like the attitude of the worshipper to the Blessed Virgin or to God. The distance between the 'lord of terrible aspect' in the *Vita Nuova* and the god of lovers in the *Council of Remiremont* is a measure of the tradition's width and complexity.²⁵⁾

チョーサーも現実の宗教とその擬似宗教としての愛の宗教との関連について考えをめぐらしたものと思われる。それは、神学者や哲学者ならずとも一人の詩人として、詩の主題を決定したり、深めたりするのに必要な作業であったはずだ。その過程で彼が両者の齟齬に気づいた可能性は十分にある。現実の宗教も愛の宗教も、その熱狂的な信者は視野狭窄に陥り、ものごとを二者択一的に考え、排他的で過激な行動に走りがちなのは、今も昔もそう変わらないだろう。そして、ツルーバドゥールの作った抒情詩には、そうした特徴が見られる。²⁶⁾そ

れはまるで、愛の対象の婦人そのものよりも、愛の神の下僕となった自己の感情とそれを表現する形式に関心があるかのようである。²⁷⁾彼らのすべてが果たして真摯に徳と節度を保って愛する婦人に接したかどうかは疑わしいし、また、婦人の中にも若い恋人との間の越えてはならぬ人倫の垣根を踏み越えたり、変節を犯したりする者もいたはずである。チョーサーは現実の経験からこういうことを十分に承知していたに違いない。不倫の関係の典型とも言うべきマルスとヴィーナスの物語を選んだところに、そうした彼の現実認識が投影されていると言える。

確かに、Bernard O'Donoghueの指摘する通り、一般的に言えば、“the earnestness (at least ostensible) of the pursuit of virtue in the courtly lover meant that his behaviour was not incompatible with Christian morality.”²⁸⁾であろう。しかし、*De Consolatione Philosophiae*などの古典の読書によって培われたチョーサーの透徹した眼識は、恐らく宮廷愛とキリスト教の教えとは究極的には相容れないものであることを洞察していた。²⁹⁾換言すれば、彼には人間と神との間にある絶対的な深淵の認識があった。同時に、恋愛の激情がその深淵を霞ませ、錯覚を惹起する事実についても、明晰な理解があった。そのことは、次に見る“The Complaint of Mars”に示されている。

V

マルスの嘆きの原因はもちろんヴィーナスとの不本意な別離から生じたものであるが、その別離は、有夫の婦人を愛した者のいつかは甘愛しなければならぬ当然の結末であるという諦観には至らない。ましてや、ヴィーナスの変心などということには考えも及ばない。彼はむりやりに恋人との間を引き裂かれたながらも、なおかつ愛を貫こうと悲壮感を漂わせている、騎士道の鑑、愛の悲劇の主人公、あるいは愛の宗教の殉教者としての面目躍如たるものがある。無骨な武人の恋の苦しみは、聴衆の憐れみを誘うのにまたとない題材と言える。マルスの嘆きから生ずるそういう効果は、チョーサーの熟知していたところだろう。

しかし、ここで取り上げるべき問題は、愛の神の下僕となっているマルスが非難の鋒先を愛の神ではなく、造物主たる神へ向けているという点である。ここには、宗教に殉じようと決意しながらも、なお苛酷な現実との相克に苦悩する者の姿が現出されている。この場合、二つの宗教、すなわち、現実の宗教のキリスト教とその擬似宗教である愛の宗教の問題が絡んでいる。マルスの非難している神とキリスト教の神とを同一視することは、時代錯誤的な印象を与えるかもしれないが、こういう事例は中世の作品には珍しくないことなので、解釈の上で支障はないと思われる。チョーサーはその作品から見られる限り、熱狂的な宗教詩人ではないし、神秘主義的な性向があるとは言い難い。しかし、彼が宗教や神秘主義³⁰⁾に関心があり、その知識と理解がなみなみならぬものであったことは、例えば“The Parson’s Tale”からも十分に窺える。

それだからこそ、神学的あるいは哲学的な問題提起を思わせる、次のようなマルスの嘆きも書けたのである。

To what fyn made the God that sit so hye,
 Benethen him, love other companye,
 And streyneth folk to love, malgre her hed?
 And then her joy, for oght I can espye,
 Ne lasteth not the twynkelyng of an ye,
 And somme han never joy til they be ded.
 What meneth this? What is this mystihed?
 Wherto constreyneth he his folk so faste
 Thing to desyre, but hit shulde laste? *

(218-26)

これと次に続く二つのスタンザで語られるのは、人間を欺き不幸に陥れる神のイメージである。人間の欲望の対象がひき起こす不幸の責任は、対象自体ではなく、それを作った者が負うべきであるという論理によって、造物主である神に対する非難の展開がなされる。マルスのこの非難が不条理なことは当時の聴

衆にも容易に理解できただろうが、しかし、この不条理な非難の中にこめられた、チョーサーの真の意図まで見抜いた人々がどのくらいいたかは定かではない。マルスの不幸は宮廷愛の内包している矛盾に起因しており、その矛盾に気がつかずに愛の神の下僕となった彼自身に責任は帰せられるべきだろう。その責任が造物主である神に転嫁されたということは、愛の神の下僕であることとキリスト者であることとは両立しえないことの証左だと解釈できる。したがって、“The Complaint of Mars”には宮廷愛を宗教に擬すること、あるいは、両者を混同することに対する、チョーサーの懐疑、いや痛烈な批判が表出されていると言える。

チョーサーは恋愛をする人々を蔑むことは禁忌とする因襲の時代に生きていた。女性を愛することは、貴族階級の若者にとっては義務と考えられ、恋愛こそが人生における最上の価値を有すると見做されていた節さえある。このような時代状況の中にあっては、宮廷愛を積極的に否定するような言辞は慎まねばなるまい。しかし、チョーサーの新しい愛のあり方の追求の思いは、鬱勃として静まることがなかったようだ。*Troilus and Criseyde* や *The Canterbury Tales* がそのことをよく示している。

チョーサーは一体どのような愛の形態を求めたのか。この詩を書く段階にはまだそれは彼の心の中に明確な像を結んではいなかったと思われる。ただ、彼の意識のどこかに、それが宮廷愛とは異質なもののようだという、漠然とした予感があったかもしれない。なぜなら、彼は宮廷愛よりも現実的で、かつ、精神においても純粹であり、何よりも男女の自由意志による、対等の関係を基本とする愛を文学的空間の中に創造しようと志向したと推測できるから。そういう観点から見ると、“The Franklin’s Tale”は重要な示唆を与えてくれる。ここでは宮廷愛と夫婦間の絆の問題が扱われ、理想的な愛の形態として結婚による夫婦愛が描かれている。

Thus hath she take hir servant and hir lord,—
 Servant in love, and lord in mariage.

Thanne was he bothe in lordshipe and servage.

Servage? nay, but in lordshipe above,

Sith he hath bothe his lady and his love;

His lady, certes, and his wyf also,

The which that lawe of love acordeth to.³¹⁾

これが、チョーサーが志向し、到達した現実的な愛の終極的な形態と考えても、それほどのを外れてはいまい。

Notes

- 1) *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (1966; rpt. London: Oxford University Press, 1974), p. 521.
- 2) All quotations from and references to Chaucer's works are from Robinson's edition.
- 3) For my knowledge about courtly love I am mainly indebted to C. S. Lewis, *The Allegory of Love: A Study in Medieval Tradition* (1936; first issued as a paperback, 1958; rpt. London, Oxford, and New York: Oxford University Press, 1975), Bernard O'Donoghue, *The Courtly Love Tradition* (Manchester: Manchester University Press, and Totowa: Barnes & Noble Books, 1982), and J. Lafitte-Houssat, *Troubadours et Cours d'Amour*, Coll. Que sais-je?, No422, 3rd.ed. (1950; rpt. Paris: Presses Universitaires de France, 1966).
- 4) Cf. Wolfgang Clemen, *Chaucer's Early Poetry*, trans. C. A. M. Sym (1963; rpt. London and New York: Methuen, 1980), p. 190.
- 5) "Convention and Individuality in Chaucer's *Complaint of Mars*," *PQ*, 35 (1956), p. 77. Cf. Chauncey Wood, *Chaucer and the Country of the Stars: Poetic Use of Astrological Imagery* (Princeton: Princeton University Press, 1970), pp. 144-46.
- 6) "Although many critics speak of these two works as belonging to a 'Valentine tradition,' and some even discuss ways in which Chaucer makes innovations in the 'Valentine convention,' no evidence has been discovered of such a tradition, either literary or in social customs, before Chaucer." Jack B. Oruch, "St. Valentine, Chaucer, and Spring in February," *Speculum*, 56 (1981), p. 534. Cf. Clemen, *op. cit.*, pp. 188-89.
- 7) Nancy Dean says: "The center of *The Complaint of Mars* is not Mars and Venus; they are Chaucer's example. His subject is the nature of love...." "Chaucer's *Complaint*, A Genre Descended from the *Heroides*," *CL*, 19 (1967), p. 19.
- 8) *Chaucer and the Country of the Stars*, p. 114.

- 9) *Ibid.*, 120.
- 10) "To suppose that medieval man would presume to put himself on the level of God in the writing of literature of whatever sort is surely most astounding. To think that he would write literature, which to him was both for *sentence* and *solace*, merely to convey profound religious truths clothed in many-colored 'allegory' seems to me to involve a great misunderstanding of that literature and that man." Morton W. Bloomfield, *Essays and Explorations: Studies in Ideas, Language, and Literature* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1970), p. 90.
- 11) Cf. Wood, *op. cit.*, p. 126 and Stillwell, *op. cit.*, pp. 76-77.
- 12) Cf. Clemen, *op. cit.*, pp. 191-92.
- 13) *Boece*, II, met. 8.
- 14) Cf. Clemen, *op. cit.*, p. 197.
- 15) Lewis, *op. cit.*, pp. 2-4.
- 16) *Ibid.*, p. 2.
- 17) Lafitte-Houssat, *op. cit.*, pp. 48-50
- 18) Lewis, *op. cit.*, pp. 40-42.
- 19) O'Donoghue, *op. cit.*, pp. 50-51.
- 20) Wood, *op. cit.*, pp. 151-52.
- 21) O'Donoghue, *op. cit.*, p. 51.
- 22) Stillwell, *op. cit.*, p. 73.
- 23) Cf. Lewis, *op. cit.*, p. 2 and O'Donoghue, *op. cit.*, p. 51.
- 24) *Op. cit.*, pp. 2 and 18-22. See also O'Donoghue, *op. cit.*, pp. 3-13.
- 25) *Op. cit.*, p. 21.
- 26) Lafitte-Houssat, *op. cit.*, pp. 87-93. See also O'Donoghue, *op. cit.*, pp. 101-161.
- 27) O'Donoghue, *op. cit.*, p. 5.
- 28) *Ibid.*, p. 12.
- 29) Cf. Lewis, *op. cit.*, p. 21.
- 30) Cf. Piero Boitani, Introd., "An Idea of Fourteenth-Century Literature," in *Literature in Fourteenth-Century England: The J. A. W. Bennett Memorial Lectures, Perugia, 1981-1982*, ed. Piero Boitani and Anna Torti (Tübingen: Gunter Narr Verlag, and Cambridge: D. S. Brewer, 1983), pp. 18-19.
- 31) 792-98.